

2025年5月25日 第二礼拝

説教題「生きている者の神」ルカ福音書20章27～40節

主任牧師 加藤 誠

「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。すべての人は、神によって生きているからである」(ルカ20:38)

命ある者は死んだ後、どうなるのでしょうか。これは人間が昔から問うてきた問いです。「肉体が土のチリに帰ると同時に、すべては無に帰す」という考えがあります。その一方で「肉体が失われても霊魂は残る」とか、「その霊魂は別の生命体に転生する」、いわば「輪廻転生」を信じる考え方もあります。臨死体験者の証言から「人は死んだら光のようになる」と語られたりします。けれども、確定的なことは誰も知りません。私たちは死後の世界を見てきたように語ることはできないからです。

仏教をひらいた仏陀は「人間の死後はどうなるのか？」と繰り返し問うた人に「死後の世界は誰も経験していないこと。死後の世界があるとかないとか断言するのはいずれも迷いである。それよりも大切な問題を問うのがよかろう」と答えたそうです。大切なことは「どう生きるか」。そこに焦点をあてよということでしょう。

わたし自身は「主イエスが見ておられたようにこの世界を見て、主イエスが見ておられたように隣り人を見て、そして主イエスが祈られたように自分も祈る者とされたい」と願うクリスチャンとして、死後の世界についても、「主イエスが信じておられたようにわたしも信じて、今をしっかりと生きていきたい」と考えています。

そういう意味で、ルカ福音書20章の「復活についての問答」の箇所は、主イエスが死後の世界をどう理解しておられたのかを垣間見ることのできる興味深い箇所です。

主イエスと同じ時代に生きていた人々は旧約聖書の「すべてのものは創造主なる神によって創られ、死んだ後も神の支配のもとにある」という、創造主なる神への信仰のもとに、善人も悪人も死んだら皆「シェオル」（「墓」「陰府」と訳される）に行き眠りにつくと考えていました。しかし、その「シェオル」の後どうなるかについては旧約聖書には何も書かれていないので、「復活がある」と考える人もいれば、「復活はない」と考える人もいて、統一見解はありませんでした。先週の「皇帝への税金問題」もそうでしたけれども、自分たちで結論が出ていない難問を主イエスにぶつけて、何か言葉じりを捕らえてやろうと考えたわけです。

「復活はない」というサドカイ派の人々が持ち出したのが、旧約聖書で教えられている「レビラート婚」という婚姻に関する決まりです。その昔、家の名前と財産を維持するために、父の財産はすべて長男に相続されましたが、長男が死んだら次男がその財産すべてとその妻も引き取り養うことが義務付けられていました。サドカイ派の人たちは極端な例として「七人の男の妻となった女性は、死んで復活した後、だれの

妻になるのか」と問います。もちろん、彼らは「誰の妻になるのかなど、答えられまい。そもそも人が復活するなどナンセンスなのだ」と考えていたわけで、イエスがどう応えるか、お手並み拝見ということだったのでしょう。

それに対する主イエスの答えが 34 節以下にありますが、ここに主イエスが人が死んだ後の世界をどのように理解しておられたかが示されています。まず主イエスは「次の世」（35 節）があること。肉体の死では終わらない「神の世界」があることを見つめておられます。私たちは死んだらすべて無に帰す存在ではないのです。その「神の世界」は、今の世界のさまざまな仕組み（例えば婚姻など）がまったくあてはまらない世界であると言われます。私たちが生きている世界には不平等があふれています。身分の上下や生まれた境遇にその人の人生は大きく拘束されてしまう。もちろん努力で克服できるものもありますが、例えばガザ地区に生まれた子どもは、爆弾が空から降り注ぐ中でどのように将来の希望を持つことが出来るのでしょうか。さらに私たちは毎日さまざまな人間的評価にさらされますが、その評価が必ずしも正しいわけではなく、不当なレッテルに苦しめられることも多いのです。しかし「次の世界」では、そういうこの世の「不平等」「しがらみ」「不当な評価」からすべて解放されて、私たちは「天使と等しい者」「神の子」とされるのだと言われます。この世の中にあふれている歪みからすべて解放されて、一人ひとりが神の愛を実感できる世界に移されるということでしょう。なんとうれしい希望でしょうか。さらにアブラハムやイサク、ヤコブなどの大昔の過去の人も「復活にあずかる者」として「神の前に生きている」「すべての人は神によって生きているからだ」と語られます。しかし、どのように生きるのでしょうか。ただ生きればよいというものではありません。悲しみや苦しみ、恨みつらみを抱えながらずっと生き続けることはむしろ地獄です。赦しと解放をいただかなければ、生き続けても「救い」はありません。主イエスはヨハネ 14 : 19 でこう言われています。「わたしが生きているので、あなたがたも生きることになる」。主イエスが私たちの罪を十字架に釘づけにしてくださった、その愛のもとで私たちは生かされるということです。罪の中にある私たちが、十字架と復活の主の愛と赦しにあずかり生かされる希望がここには語られているのです。

わたし自身は「次の世」を知りません。けれども、主イエスご自身が「次の世の希望」をはっきり見つめて、今を全力で生きられた姿に、深く惹かれます。主イエスは愛の神のもとにある希望をしっかり見つめておられたからこそ、この世の人びとの勝手な風評やパワーゲームに惑わされることなく、神に従い、目の前の隣り人を愛することにすべてを注いでいかれました。わたしには、主イエスが生きられたその事実だけでじゅうぶんであり、わたしも主イエスが生きられた「復活の希望」を見つめて、主イエスが教えてくださった愛に生かされていきたいと願っています。